現代インドネシア・カトリック教会の巡礼研究の展望に関する報告
ー社会変化の中でー
Report of the Research Plan about Catholic Pilgrimage Studies in Modern Indonesia: In Social Changes

織田　悠雅
上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科
地域研究専攻博士前期課程 2 年
ORITA Yuga
Sophia University Graduate School of Global Studies,
Major in Area Studies

本発表では、現代インドネシアにおけるカトリック教会の巡礼地に関する研究展望について報告する。ムスリム・マジョリティ社会の中で生きるインドネシアのカトリック教会には、活発な巡礼実践がみられる。その代表例がインドネシア全土に分布するマリア洞窟であり、特に中部ジャワは他島からの巡礼者を惹きつける、カトリック巡礼の中心地である。

本発表では、まずインドネシア、特にジャワ・カトリック教会をめぐる先行研究の整理、批判を行う。これまでのジャワ・カトリック研究は、教会史や宣教学、比較神学といった分野からの研究が主であり、これらは上からの視点での研究であった。しかし、下から、すなわち民衆の視点からジャワ・カトリック教会を見つめる研究は十分に行われてこなかった。またジャワの宗教研究において、イスラームや民間信仰を主題にした民衆の視点からの研究が行われてきた。しかし、それらの研究において宗教マイノリティであるカトリック教会が触れられることは限定的であり、特にイスラーム復興が進展しイスラーム的価値観が広く普及している社会の中で生きるカトリック教会に関してはなおさらである。

しかし、イスラーム復興や民主化の負の側面が重なり合い、教会への攻撃などが発生する現代インドネシア社会において、そのメカニズムを明らかにする研究と同時に、民衆の視点からカトリック教会を研究することの意義もあると考える。それは、イスラーム復興や民主化という、インドネシア社会の変化に関する言説を宗教マイノリティの視点から再構成することにつながると考えるからである。そこで本発表では、ジャワ・カトリック教会を民衆の視点から分析するために最適な対象として、カトリック教会の巡礼地を提唱する。そして発表者の現地調査の成果も含めて、巡礼地の動向と今後の研究展望について報告する。